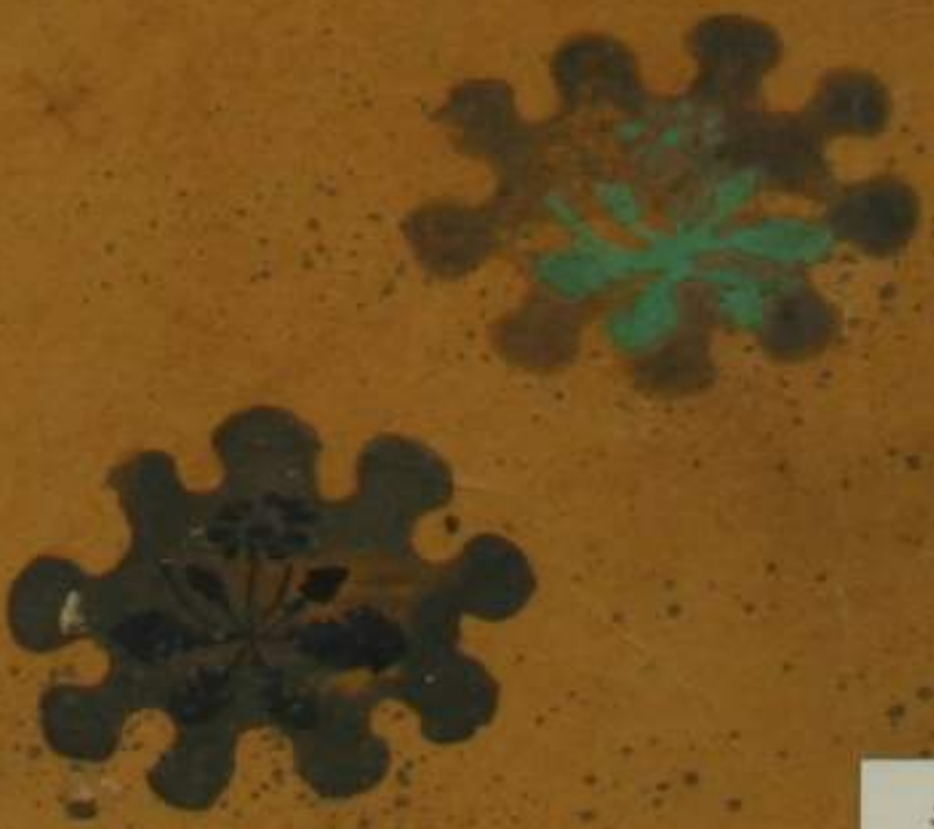


東
壙
子

二



洋学文庫
文庫 8
C 242
2





東牖子巻之二



^{一かきん}それ本朝に少儀の國より唯質実のこ^{ナニ}と欲して^{かき}又美を
^{くまやま}婦人が故に國晏々^{かしこ}氏堅^{たか}し^まし^た尚ほのれ服^{はく}るを^かし^た代^{しろ}代^{しろ}候^にて
^{つこ}然^たア^とて^もその^い武家^ぶ候^にけ^しと^も又^ま又^ま用^{もち}ひ^らる^る事^{こと}なり^はく
^{うご}肩^{かた}衣^い袴^{はく}を^をた^とと^も上^あ下^{しも}と^も云^い佩^ひ刀^は若^わ儀^ぎを^を大^{おほ}小^こと^の唱^なめ^る
^{いせ}上^あ下^{しも}大^{おほ}小^こと^の武家^ぶ假^{かり}初^{はつ}の^にれ^ら服^{はく}紐^{ひも}佩^ひの^の儀^ぎ表^{あらわ}湘^{しやう}リ^り元^{もと}來^{きた}
^{まじ}宗廟^{そう}の^の茅^ま菁^{しやう}所^{しよ}を^をた^とと^もみ^み不^ふ賢^{けん}朴^{はく}と^もめ^め^し^た^ら病^{びやう}熱^{ねつ}あり
^{これ}是^これ^の奢^{しや}ん^たら^しと^も寧^{ねい}儉^{けん}せ^しよ^しの^の聖^{せい}語^ごと^も傳^{つた}へ^りて^し神^{かみ}の^の教^{くわう}育^{いく}
^{まじ}半^{はん}乃^のの^の礼^{らい}の^の用^{もち}と^も和^わと^もを^をし^て大^{おほ}に^に和^わら^すく^を國^{こく}風^{ふう}を^を

東牖子巻之二

其れ其れの儀表より度致し和儉せる本朝神叨の
 教を所誥の在邦ふむるに先ず定むるに漢書専門の
 徒の種々清士顯負と云どもも本朝の教あり清士の首
 戦國の間君臣父子兄弟の節と礼男女の別と夫は禽獸も
 父子お愛とのいふ一蓋本朝のいふ一帝將皇としてとて
 雄略帝の清得のこれ至孝の玉體と自野猪を踏殺し
 後の神功皇后の遺勅なりとして清懐胎の清身と夫は征
 伐し終身を嘗に凍然と冷一に固かり地長をわたり
 むけてとわがと教び男女のちうひと睡びふせども寝奴
 王妃のこの國を傾る淫婦と並呂氏武氏のごとく暮年
 の毒

婦かごは金男女の別備りてなり後漢書の東夷傳に
 備りてふに道と御と下不老君子國なりと稱譽し
 陳壽が之國志の東夷傳に男女別有りを讚美たり行
 貨直朴実の君子國たることとて故衣服是財の制度行
 清との如く無用の文飾と用ひ人子を貴と也所誥の先
 進の所は後れんと宣へるも別のけりかごごごごご

○才徳兼一と聖と云才者徳の具と云を賢と云徳者
 才の具と云と君子と云才者徳の具と云と小人
 と云才も徳もかた者と思ふと云
 ○智者者之聰一才者とのいふ神祕なる者ハ強一

神教者と多々かり智と神教とは徳を傳ふを

○排潜の獲白と内徒歳且歳暮の白と扱病せん標題小

西節吟或吟余吟かど吟はを書らるる忌不存例也樂府

明辨之吟嗟慨歎悲憂傷思以仲之誓曰吟又屈氏漢文の辯

又澤畔吟とわと歳首はをすすは字例あり

○亭と東とをれ持人と半東と茶道の具社の生東の

こけり出に梅とるふ左傳小晋秦鄭と圃鄭のい秦

蓋舎鄭以東道とわと云夫鄭の秦の東からと是より

之くと東と梅とるふ

○茶室の潜口とにむりよと云貴姓長幼の分なくけ

より出入を全元居の制より也はととのを大伴と或は自

炊獨矣とらとに冥く登勝よ小室を補理古是古筆を

収び宛を本と寂を甘と和と柳次爐と没思とをふと

は刻物を不羨来とつをさふは降るち飯後酒の食の大と忌

まげ皆神代元居の遺風ともいん全好古のれ茶小儀るを

使素小儀とといわおちと寂莫と寂味とを云不不の

道へととく者へ惜びと利之の豊とがや不後有愛

○我内の縁氏婦とらして街妻とほなり或曰左傳昭の

二十二年小有仍氏の女其美色といふ云妻と云と

云妻の字に七左傳より出たりといふ例の妻字の

躬と刻し半の刀と用るふりてさう按うに字書に鉉ハ賣
 也とありは然し此婦とて賣婦とに之を之とて
 法妻ハ街妻あり也東都七傾城甘之の所莫と成者を女街
 とても街と售たり也

○世に存星の盆とて古名有て法書とこれと目利とて
 存星の盆出来或は後出来とて鑑定に存星と器物の作
 匠の名と是はつる候なり伏見東の張成之盆の地而小甲成
 それを存星と稱し張成古今の細工なりとて南都土門
 氏所傳之候し内存星の盆あり是ハ東ハ殿法所傳之候也
 一を傳來に之候し西端徐熙の路松尾肩傳存星の盆と

伏見張成よりて下西とる講之圖を許由甄と稱る處とて
 土門氏の筆記の寫を友人南都の安理和の元よりて是は
 法書多賀城の碑ハ中古之礼と土中に埋きて年久し
 く知れざるに河邊の吉村朝巨大に巨萬の材を費し
 之城郡臥里屋方と地下五尺に掘せらして後に堀内り
 之を掘出せし處に石居並今之城郡市川村とて有碑文
 暨石の形とてさう諸書に出たは之を爰に贅せたり之は法
 秦漢の昔ありて女朝の業とて稱し之を漢多賀城と
 漢守府は乃得とていつと法守府ハ法守府ハ法守府ハ法守府
 一此と之城郡とて惠美の朝稿とて之を再興のより碑文に

之の是を初の碑に腰に都小育一々又碑面小里粒と記
 こよ一の字の古法六丁と軍之今も從更ぬ一は六丁と軍と
 古道と楯と首と今のどく驛舎の自中かく以程乃
 日殺と様と楯と括と括とてり故に諸方のの道法をそふ彫
 ふせり今の軍防令よそとそとそと楯と耳塩式并と貯備
 ともと海軍没の没月分小貯ふ是なりとて諸こ乃
 碑面よ西の字と書とて一左壺の石碑とて東よ南とて
 穿鑿とて一是より東と海なり竹と石と碑なりんやこの
 西の字と書とて一八軍没は法身府地家より来り一者の
 乃小方角を志也とて一ののののの

○本朝の七ヶ板せり一法於上への撰擇集を元々の頂板
 以て中門の申は小見下りりとも一足利学校の活字板
 性一小見下り愛想國師の書と高所直板以て一も活
 板なり今の板は慶長の末より初めて連続してり白紙
 先きの文録記より天正の頃一字板と作るも一はいより慶
 長より連続たりとて一
 ○河東河人の腰と屈すぬ一板は國風とて箕踞一或と
 腰と伸る一は波國の解體新書と見たり小変り一経絡の係
 と屈伸なり一は道埋か一む清去人も一は曲録交傳よ
 腰を食と本朝のどくたて食と一はふ養せふ慈一



丹枕溪寫



しつや清く人たて食と内しとをたつ怒りしと

○平地打の史書の戯の清家筆記の和海清小周陳し書

つらまわり今も浪をたれ得るしと起る平地打を

せり系所の小史柳の枝と造りる平地の枝とらんく

の構と深くて松せりし制柵の支の席皮と糸一柵糸を

きつり取よ菱形よ皮を剥身の支いふ皮とひれて白

本とせり平初れ頃とらんぐれ棒とせよ已端平ホ

くは脱物とせり之来大打と大退物と戯撥せりしと

○うらまの字の圖とさうげ○禁裏の何よ様の子本

だうげ此二字際あり方の史書とせよと

○柳とみどりくふいひしと對と山姥の謡曲よ出あ

い一らの結構は体わぶの終章なりしと云はてなりしと

たまゆりしと和海道小西の法師のいしと式士の道杖

かなくて式士より和道の道杖をきて和弁小から方の道

杖ふれ方に布をうし孫と道乃連人とは云だうげ花と

和い柳とみどりくふいひのまけけりや一有しとんを

と山姥の謡曲よ柳とみどりしとる身二義のうら

○艸の精秀をばゆのと英しと雲の群よ特あつとのと雄と

云故よ人の文式茂異をばと名づきて英雄と孫聰明秀出

と英しと臆力人よこころを雄しとこし楊慎が丹詔録に

と英しと臆力人よこころを雄しとこし楊慎が丹詔録に

源守の景物などぞ釋教哉と孫まごとては侍しやうとて能よひるなり
南なん守しゆの下したにそしるん事ことかんがへる色いろは神かみ杖づえ二ふたより下したに
かといふ源げんも出でり人ひとも色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし
真まの藝ぎ漬づけの幸さいれとよけとて漬づけの幸さいれに塩しほのさたりの
くいらしめぬものなりとぞ

○網あみ代のよ復ふ渚しほ復ふ良らくが後ごとて活い定ぢやうせとれ夜よ吐た古こと
えらに網あみ守しゆ網あみ代よと縁よこて人ひと丸まるのちふと

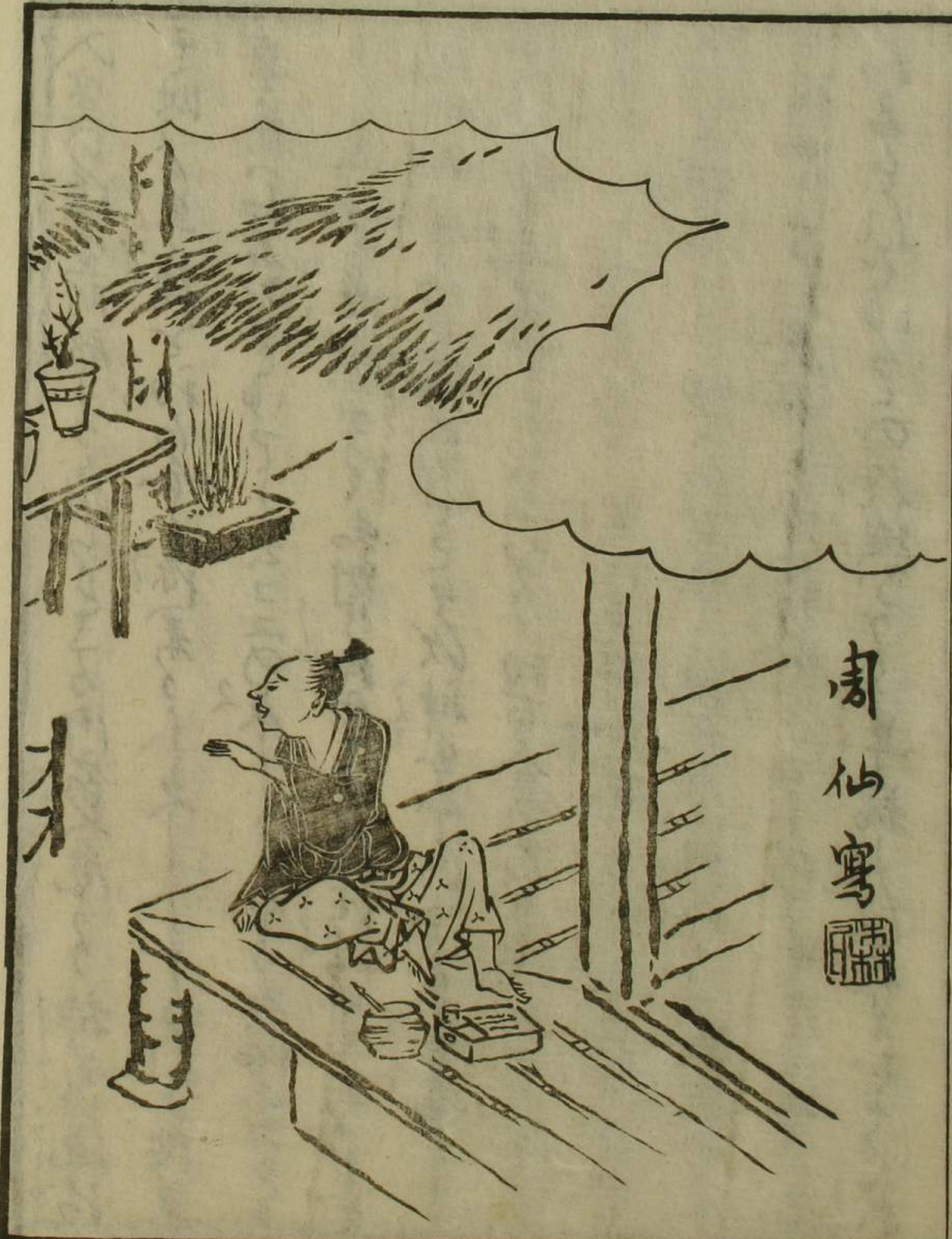
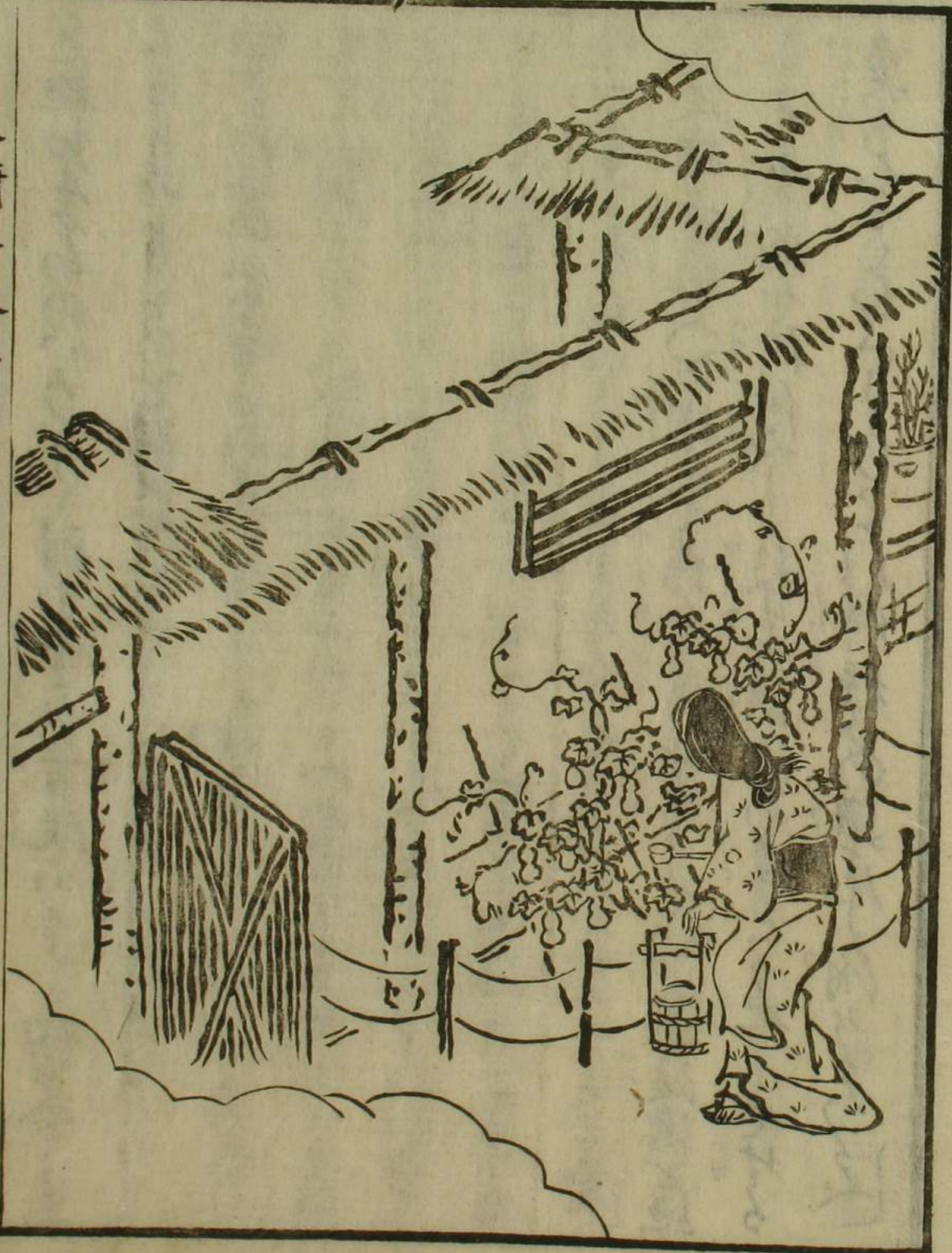
とらしめよとてし願ねがもす網あみ代よ人ひと再またと名なのゆらとらさる
とて網あみ代よとつる竹たけのり復ふ良らくがとて色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし
とる湯ゆあり今いま九く州しゅうとて大たい洋やうの内うち小こ浪なみ欄らんの場ばとて

て海うみ税ぜいを納のめ灯あき糸いとが網あみ代よ波なみが網あみ代よとつて人ひと自みづかりく流ながり
の網あみ代よと換かねりと復ふ良らくと湯ゆありとこれ網あみ代よあり青
と水みづ使つかととる色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし
橋はしの場ばとつて色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし
色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし
河か備び物ものかどの流なが曲まがのりととる人ひとと

○曾そ我が足あしの足あしと十じゆ師し依い成ぢやうと色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし
これ長なが初はつ節せつと美みと色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし
しつと色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし
母ははの才さいと准じゆんとみ師し依い成ぢやうと色いろは流ながのり幸さい子しも色いろは古こ風かぜい甚いたし

よして工後二膳の英雄と号し曾我兄弟のよしと備のく
工後と号す是に田忠常が彼首許許の右大臣殿の二膳
法師の行るふが曾我は弟と同日の漢りて中東氏の毒
計よあるものなりしは政長幼の病を失せしに北地と
母よ此頃ハ正書の嫡子とち師と称妻服の嫡子と小を師
と称小改師小を師と称とゆふごとく嫡庶の別を野史
小改といへども書と漢と漢くはるるがべといはなり
○初百合と称するもの草藕なりしは和州遊歴の折に
旧都一室院定許の侍流を預り安田宗頼子の妹を以て
一室院の由来と尋ねしに是利定度法師と許

入室の頂室所殿より附らしては御家人流より妹を流す
そは草藕と初百合と称するものなりしは和州遊歴の折に
草藕は和名かきこゆと云ふユの及しと云ふは俗力タラ
りしと云ふ真ねふまき和州守流ゆも是は法師はふもありしを
播州神出の満山かきこゆ神出といへるは有馬より
又ゆり有馬家士と云ふなり初百合のれを流すは常也ふて
むやしつごたかり爰に先年行末と云ふは誰人貝母の
花を我家より初て初百合と称せんは物たる被成せし
と云ふは貝母と母子百合と云ふものなりしと云ふなりと
初名をいひゆくの程はなりし草藕ははれもあつる



周仙寫



と枇杷李白のいろかく疎小柔花者流うらぐ初百命を去
 云るりの有とものと備此がここゆりと萬景及新撰の帖未り
 派と内西の堅香子の花ありしと云波おとと寺井のう乃
 かてうのくふとてう休例寺井のよみ命せりてかてこは
 何物ありてかてこは海山のものをと家名をてく山植て
 生育志然と物ふれどていゆるて一名うとゆり又文章
 ゆりまうそ初ゆりしと云日先ふとそとごんをいろとてしと
 ○人相者流人と相て為命あふあしていりふ法徳と通
 して幸福を祈ぶべし一教生は法徳の至むる也とせける
 奥をそとてししこれ佛種子の蓮尾の附りるゆに

むけりを教とら君子れ悪むをたてしと孟子曰君
 子の於物也愛之而弗仁於民也仁而弗親と宣武奥人
 食より耕作培養の助たりんは天是よ子を授るふ一尾の
 万とひと足遠化の自然たり竹んぞこれを授らて法徳が
 しと鳴ほるゆいんや奥者の捕するを授は法徳の相
 ち程が復復者があるふは生こそんと却ら奥者を捕り
 者がゆあるとて列子は激し流るる俗流ふ奥者を捕を
 六年止むと人の食盡るふありしとて授有るを法徳の
 施す能らるべし法徳のゆかるとゆくまさんのも
 ○先天の黒底としりて後天の欠缺を生じ眉毛を派

額と後て遊治妖奸の安しからんより道徳に善の教を
 諭して麗容は體の君子たるんとて教を授けて風鑑
 者流の道より一諸風鑑家たるはと内不親相ありひ
 と者人相なる書しと不親の字を詩小相在爾室尚
 不愧屋漏とて相なると相と人との相と云ふも不親
 者の字に不尚を御那代醉十五云一士子外省誠甚愜意
 待榜因遊僧寺廊廡有鬻相者遂扣之鬻相の字に
 ちろ一橋頭賣卜寺院鬻相和漢域と角と云ふなり
 ○家相丈に流り都鄙賢愚こし著と云ふ人多し按ふ
 劉済が釋名に宅托也人之僻處也として必竟人の人物或は相

かどくゆかどく又刀刃の鞘柄は竹徑介傍見半に金
 根と樓たりと身純刀かた竹の用を云ふや白鞘切柄
 して名級と号し家相すこり四神相の比の家
 宅十々具是一金城湯池の固ありと云ふ備愚なり
 竹で長えか人秦の始皇河房と造り二世河房と斃と全
 家相は貞慶なりと云ふ一爰に予游歴中にたりて活有
 和州新田なる高賈家相と云ふと然る良花なり家相者を
 拓れ若家と号して宅と造り十分若相と云ふて西之三年
 の福今や来らんと侍らふ身よ不女と云ふなり劉延祐
 家断絶及びね又るが寓せし溝村同く家相者不指也と

文部門を遷去荒と挽きて相者の意は任歩右相満て
 と收び一に翌年の春合家温疫と病をまじり相續とてこ
 盛にの嫡子を失ひ普皆に散財し之組傳来の任所と受た
 了そ大不幸行りてり避るゝかたや地長を感いよく解
 じき家相と寓一ふと執しと方へるが如しる百姓して
 村長と勅免伶俐なる甲けり心哀哀この所と着て九府法
 とと一徒を

○本曾街道は古と今のごとく人馬は往來交りてふりて見
 えりり流曲のと焼れ發端より若光寺まで親たのむと次々と依
 どりて約の旅意と都の舞女伝州若光寺詣を志し城路

へじりて城後おびぬのこりてと焼く遠く有なるは流に昔と
 今の葛橋番の渡りかどと棧の中にはまらんと申りたやと
 他那のとの渡りぬぎ路程の渡り合をほかると
 一とく推美とゆふまゝと在るがよと百軍と号しぬ伝州
 若光寺へ武百りも有城後ゆりてと内をくまへ一お家既
 関楽向ふも中山道へゆりり本曾屋とぬ向りてはま一
 本曾屋自中からたて居居と経くまをちちち家路糧道と
 断りては俱利伽羅山向りては本曾の坂路自中から度と
 けりか徳成と成り伝州とあり順路明らりてまうりて思年
 武百年と朱莫大のくまへ断岸後壁を筑うと設舎と定

延いて本考所の以程川支の憂なく延也の士民と自以と
崇むる一と実道廣と清けくはははたはるか

○坊南今更村に往古之御厨子所目く供御の料れ奥
洞進の処より由緒有るところとて現立し諸役御免あり
御の例よりして今より不絶正月十二日ハ上御所院御所
執柄家一太朝を敷上り村長若原西人太致と着し一内は
幸無て京兆尹西御奉所所清れとをく障村にけし
古武宥しうやむ祇園太更く神輿と祇園舎の昔の由村
より加興丁と初よりこれ供所洞進の順京に東けく原
今更村の役所を構有替ふ以下今更村と洞進の役と

初は後冷泉院の御宇祇園舎初ははは東けく店、
西へ祇園太更く轉を定むる今更村とは今更村神人
所也 店より神輿と昇すは例よりして今更村より加興
丁よりむに故に今更村の店より北の口を今更村か酒に此
比の口より課没の所及渡清くは順方所く差あり半
響る後と略と此比の口より刻方より持家更北の堀刻よりと
諸の村より元祿家承の比を七の圍の次といえる壺蘆と
物より藏頭藏尾よりて帶藁よりては丸圍の夜より号
人より血よりその一七号佩よりて孫殿と珊瑚珠の緒メ
少料して貴家よりてはよりやは代流のより一今更



佳胤
 哇窩

て彼村の壺を造りて之の夜といふ夜はふたつに
 ○酒を飲て面色赤くおぼるゝのいふは厥からるゝのかりと色の
 まくかりともの肝の燥りたるの故色の赤くかりの酒
 カの臍を助る左路達とて物にほび面色の青かり者
 と酒力と肝の臍小備と左怒を費し元来謀慮の友たる
 肝を得る飲ゆのりく理座を言ふ夫肝の臍は本に属せし
 左水生本の理ゆて大豪飲の究て面色をれりこのゆかりま
 のの臍は火とて水割史の理にして飲ゆど然も酒元カ
 水かれども味辛熱の物ゆて熱物を火と口氣相旺と
 主の臍と流冠したとて肺金熱火怒と脾去い土

郵水とてこれをも腎水とて辛熱の火と痛し故を肝臍
 と酒と結余とて臍と酒を更ゆるゝ青赤二色と氣との
 ○湯を臍とのいふとては湯を臍とのいふとていふ
 故を方歩ゆて一板の嶮をゆてはゆては遊汗とて
 之湯して骨と困睡せし夜と夢外て何事も是るなり
 ぶはゆゆとて大よと見たり是湯をとては左なりとて
 るるといふなりとて此は是るゝとてはぶとて有釋迦は是
 と傳送減しやうりや赤淫ありんか
 體中小流湯の二つを流通とてはとてはとては
 冷水を飲ても小使暖く極者中熱湯を飲ても小使ら

火傷せざるは法陽二をそとせとほて大過不及にけざる

○下戸と妖物を母あかしくして元姓と云ふは女を

篇とて夫と旁と次第に夫は女の化物能く人と害し

家を破つてまゝに之國を傾くから妖物古来今世に於て

○扇子合子權子跳子都は此類にぞとて古来より子母

と係りながら例として今世奥州南部の民俗に於て器物音

子の字を添く稱と筆子榮磁子風呂敷子といふ者之

海内からて子と稱せしめや

○高山輝と云清土人之室曆明和のはす七船をせしり

此は瀬原流と東海は着るに官府より東海道を行く

長評を送りゆりり岸路小富士山を見て大よ思怖し岸路

高山輝と夜せし名もくや情感と七願能書之商賈にして

文雅の人物なりと云高山輝は移しよるを支那と云ふは

夷の國を巡りて一に富士山のてゝ文がしりや之は形温

中して獨秀をよ沖さるるに合を叙しとて一諸日本は

卵少勝りて以類をれ半あり之皇孫連流とて一或は

海外に遠く富穢の青骨に獨歩し一貨材大に富饒しとて

俗にしく人物多し半美夫一般に無れ処ありといふは故に

船を慕ひ漂流の後も連年崎湯小来たりといふや

○桑抄の俗名の浪カマスゴと云物を食し湯は園邊に海

濱よりおぼりのかき海濱の漁人といふことと云はれり
や河原のかり長といふ物と云ふるや云ふ明なきは
名は常しと云はれり序田令はみやびと云あり

○米麦粉の樽けを江州の氏格カニといふり我内ていボ
ナリと云はれりふカニの儀ありわのめと云はれりて五月の
雑煮をわんと云ふ義ありいふ吉原斗のうんと云ふを
箸と云ふ坂つてかん者と云はんをけを兼と云ふと方と云
をいづるをいふ望田浦の漢者の意を云ふカを和といふを
約半舟なりと云ふ東補塞大坂と南代我内ボウブと
和といふといふボウと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

意をいふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
ロクダイと云はれり火床の略語なりこれを
○矢脊小原の古氏と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
む官にりて所と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
唯の古氏と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

○中納大郎の書は伊代集令は百卷菅家類聚國史百卷
大同親聚方武百卷といふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
聖書統記といふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
貴の功と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
家司佐野氏と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

不知未考有の天初の書也警者小して六百卷の書と稱記
 一編集次第根の序と謂ひて一鳴呼壺壁天に輝さ
 文運大に小をり一以の世小孝經二部と漢すを空一う音
 とん枕一やいんしは漢或醫の門は許多の病諸を志す
 一外冠病療作と大書して戸又症と按り小醫經方書中
 一難治一と難字のわごと難病と云難治のいんげんは
 むこくが家業ふよいて下次の志氏備力の野士と云
 書を考ふべしぬもありゆり控と制介の賦と云又書
 一漢づり之紙集うりもほしう金一と云り
 ○或之地黃丸の丸れ字と反魂丹の丹の字と此丸丹の字

の篇を或醫師よる一少陽者かると一もたうり記ふん
 ○淋瀝種一とこのを伊州上野指風尼といふ人より桃青
 子一送りし一衣うん衣をたれ宜投して制で世物教号
 一そ右の肩のひき手殺り服びり一介の子ゆか一指風
 尼の娃一り未華老人一と云方一り一は徳く一り
 此指風尼之淋瀝の上より名月やとてまらる様一とら
 一とるのまじけ歴のる集をよのま一号く一たわひとる
 一とるま一りやせ流布せざば一とら
 ○俗方ふとらうり一とら一伝一梅を夫圖方一と云偶中せり
 又空のまたるをどんり一とら一曇とら一なる一とら一をねり一とら

云のふ多をぢだんご踏ふと云の地糲ぢぢと云の物糲ぶつぢぢを糲ぢぢ
 糲ぢぢを踏ふ容ゆるふれどかかなりと云の踏ふ研けんを文選ぶんせんの注ちゆの踏ふ研けんと
 洞谷どうく空くう大だい魚ぎよと有あ血ちゆうと血ちゆうを洗せんふと云の唐書たうしよ源げん林りんが傳でんふ以い血ちゆう
 洗せん血ちゆう汚け穢たい益えき甚しんと有あ金きん中ちゆうより立たちふ大だいれれを湯ゆぬと云の飯いれ
 かりと云の米飯まいはんの乳にゅうの別べつ医い道だう緒しよの湯ゆのれ金きん中ちゆうに米粒まいりやくをを入いる
 ○清せい去きよの俗しやく語ご縁えん商しやういと經けい紀きと云今いま長ちやう崎さきと云ある商しやう費ひ乃の
 常じやうに用もちふと云今いまは本ほん那なの商しやう費ひあつと云の寝ねれを
 不ふ潔けつれと云となりと云不ふ經けい紀きなりと云

東瀛子卷二二終

